“号外,,パート7　平成24年7月11日　発行所:四国時報

お粗末な被告川上の悪足掻き

〒768-0011
観音寺市出作町 603-3
電話　0875-25-6883
編集発行人　木下俊明

読者の皆様お待ちかねの対小悪党川上への反撃号外第７号です。これまで小悪党・ゴロ付新聞社主川上道大による公共性を装った形態で、その実は、当四国時報潰しとその理由付に、現下の社会的風潮を小狡く利用して反社会的人物に仕立てるべく、苦心算段、虎の威を借る狐、コウモリ男、ネズミ講等と悪罵した記事に対して、原告からその表記の１件毎に反論、反証されて、小悪党の川上は困惑しているようだ。えげつない個人攻撃、大袈裟に騒ぎ立てる。これは、人の疑惑を洗いざらい暴いて、白黒を付けんと気が済まんということとは、正義感とは似て非なるものだ!!まして捏造記事で、ありとあらゆる事件に、原告がさも関係あるが如きに組み立てる安っぽいストーリーには、賢明な読者の方々の多くが、川上の所業に冷笑しているのが現状と聞いています。にもかかわらず、現在進行中の民事訴訟における法廷へ、川上の代理人の弁護士名で提出の準備書面の末尾の記載には[公正な公共記事の報道をモットーとしている四国タイムズ]◎被告は公正な公共記事をモットーとしている。◎個人的なスキャンダルや恨み、つらみとは一切無関係である。◎被告が原告に関連する記事を執拗に、ある意味で激烈に報道したのは公共の利害に関する公共の利益になると信じたためである。と臆面も無く恥じらいや、躊躇いも無く陳述する厚かましさである。もっとも、この代理人は先般６月１９日の四国新聞において「国賠依頼を放置」香川の弁護士提訴と報じられた生田暉雄弁護士である。世に類は類を呼ぶとはよく言ったもので、６月２５日に小悪党・ゴロ付新聞社主川上の意を受けたと推察できる女性から、電話による「探り行為」があった。内容は、２４時間風呂の製品に関する問合せならまだしも、販売形態や円天について、遠回した言い方の下手な問合せを演じ、最後には、「情報収集のため...」とボロを出す始末。もっと上手く質問すればと、録音を反訳しつつ彼奴等小悪党共には、同類の輩が集まるのだなぁと納得しています。この女性は、当方が録音していることを告げるや、慌てて電話を切ったが、当節電話や会話は必ず録音されておることも知らぬ程度の者で、失礼ながら声や、喋り方に軽薄さが窺える人でした。つまり、川上は確たる証拠を得られぬ焦りが、このような手段を取らせたものと推定しています。そう断定できる根拠は、これまでに、このような内容の「探り電話」が皆無であり、川上の陳述書での捏造記事に沿った内容だからです。さて、７月５日の川上発行四国タイムズ紙面は、前回よりスペースを多く取ってくれて、原告の生い立ちの一部や、原告について、まぁ奇想天外な話題の組み立て、原告の悪知恵の巧妙さに恐れ入ったとのこと。恐れ入ったなら入ったで、そのように恐れ入りなさい。相も変わらず支離滅裂な記事や表記、１枚の写真を提供した者に、撮影時の期日(顔写真)(複数人写真)を正確に聞いて表記しなさいよ。この写真は盛力会当時の写真であって「飯田会長舎弟の関係者らと木下」とあるが、間違った表記をあえて記している。まさにこじ付けである。

裏面に続く

又、今回名を取り上げておる者は、盛力会当時に縁組しており、川上の記事は正確ではない。このような作為的な行為に及ぶのも、如何に川上にとって客観的な証拠の入手ができない故の焦りであろうか。単なる普通の名刺を入手したと、さも鬼の首を取ったかの如く、尋ね廻ったり原告の人生がどうのこうのと論評しておるが、それでは川上には他人を批判する資格があるのかね？「我が糞は臭くない」のたとえがあるが、小悪党川上如きが、己の立場の自覚さえできず、同類の輩と悪足掻きを繰り返し、思い上がるな!!このような口舌の奴に原告の生き方を言われるのは片腹痛い。原告は、あらゆる人達、誰であれ縁があれば一期一会の精神で望んでいる。これによって公共の利益を害した事実等は一切無い!このことが「論より証拠」全てを証明しておることになる。原告発行の四国時報もお陰様で「第９号」を発行できた。小悪党川上と違って、行政、公職者の皆さんから、「川上の記事とは正反対ですね。」との評価を得るまでになって感謝している。川上の目論見には外れた結果が定着しつつあり、現に取材先で川上が高松市のクレメントホテルでつまみ出されたような事は一切無い。原告に行政に関わる事を遠慮せよ等と言うが、そっくりその言葉をお返ししましょう。大きなお世話です。川上こそ最近、県議会でかつてはフロアーで我が者顔に振舞っていたのが、四国時報の反撃が始まって以来、「顔を出さないなぁ」と県議諸氏が噂していると伝わっていますよ。時々は出かけたらどうかね？我がペンはひるまずとも行き腰が折れたのかい？川上の方こそ行政に介入を控えるべきじゃないのかな？現在、高松において不倫報道による訴訟を四国タイムズ社が起こされ控訴審中とのこと。小悪党川上は、訴えられることや敗訴に慣れており、その神経は常人並みではない男である。原告に関する記事の末尾にある「･･･どちらにしても、行政や政治への介入は控えるべきだ」とあるが、この表記こそ小悪党川上の本心を無意識に吐露している。すなわち、四国時報創刊前まで、我が者顔で一人独占状態であったミニコミ界であったが、四国時報の出現により危機感を抱いた。これが底流にあり、１２月５日号から続く悪辣で、卑劣で、姑息な中傷報道を必死で行っているように映る。これはまさに図星であろう。それにしても、小悪党のくせに、自らをラストサムライと未だ懲りずに自称し、称させる風を装っておるが、自己陶酔にも程がある。さらに毎号の記事には、新鮮さが無く、ネタが切れなのか同じ事をネチネチと、何時までも繰り返すだけに、川上の数少ない読者は辟易している。特に襲撃事件については、極度に脅えており、その再発の牽制の為に、古い事件を毎号に書き続けておる小心者でもあると、多くの人々の笑い者になっているようです。小悪党川上の論法「･･･のようです」とか「･･･疑われる」等と曖昧な表現が許されるのであれば、原告の耳にも川上に関する風説、風評が届いている。しかし、小悪党川上と同様な手法を用いれば、世間様の評価が小悪党川上と同じに見られます。あえて、記事にしない事柄は驚く程の数を保有しています。本抗争は、川上より先に喧嘩を仕掛けられた事件であり、終わりなき戦いになることには、何の躊躇も原告には無い。要は、四国時報潰しの思惑から、裏取りをすれば、明らかに嘘だと分かる記述を嘘で塗り固めて「原告がこんなスキャンダルを抱えている」と世間や裁判官に思い込ませるのが狙いで、翼賛的な原告潰しが行われている。この機会に徹底的に小悪党川上にお灸をすえてとの激励もあり勇気百倍、戦意満々としています。川上の泣きっ面が楽しみですね!!次号をお楽しみに!!敬称略